
バカと真面目と召喚獣

いいですとも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと真面目と召喚獣

【Nコード】

N2045Y

【作者名】

いいですとも

【あらすじ】

文月学園の生徒である金城香奈は、体調不良でFクラスになってしまった！？
友達思いな香奈は、仲の良いバカな友人達が起こす騒動に巻き込まれる！

香奈は平穏な学園生活を過ごすことが出来るのか！

坂道と桜並木とプロローグ（前書き）

読んでくださる皆様、見苦しいかもしれませんが、どうぞよろしく
お願いします！

坂道と桜並木とプロローグ

校舎へと繋がる坂道

その両脇を彩る春を感じさせる桜

初めて見た者なら誰もが足を止め、そして嘆息するだろう

その坂道を、息を切らしながら、全速力で駆け上っていく少女がいた

彼女は特に目立つところはなく、しかしとても整った容姿をしていた

彼女の名は金城香奈

香奈は、坂道を登った先にある学校の生徒である

文月学園

それは坂道を登った先にある、とても特殊な学校だ

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園

それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い

そんな学校に通う香奈は、坂道を登りきり、校門の前に立つ教師に挨拶をする

「西村先生、おはようございます。すみません、遅れました」

「ふむ、金城が遅刻とは珍しいな。何かあったか？」

「家に筆記用具を忘れてしまいました…」

「なるほど。次からは忘れ物をしないようにな。」

「はい！」

会話から分かるように、香奈は教師から信頼されているようだ。

「あ、西村先生！おっはようございまーす！」
「遅刻だ馬鹿者」

∴ 後ろの学園一のバカと違って

「吉井、遅刻だよ…」

「あれ、金城？金城が遅刻するなんて珍しいなあ」

「うん、今日はちよっとね…」「ふうん…」明久と香奈は一年の時
から交流があり、とても仲が良い

その為か、吉井の成績は昔より良くなっている

「ほら、二人共受け取れ」

そう言っつて西村が差し出したのは、二つの茶封筒

「ああ、僕は大丈夫ですよ！どうせFクラスでしたし！」

「そんなことないよ…巻き込んだじゃってごめんね…」

香奈はクラス分けの試験の日、体調が悪く途中で倒れてしまった
明久は倒れた香奈を保健室に連れて行く為途中退室。結果二人は全
教科0点になりFクラス入りが確定となつてしまった

「謝らないでよ、自分の意志でやったんだから」

「でも、今の吉井ならきつとDクラスには…」

「そんなの過大評価だし自分の意志でやったつて言ってるじゃん！
金城だつて前日に、僕に勉強を教えてなきゃCクラスにいけないかも
しれないんだから！」

「そんな…」

「金城だつて僕を責めないでしょ！？僕も金城を責めない！だから、

金城も自分を責めないで！」

「うん…分かった！」

明久はとても優しい男だ。だから人が寄ってくる

明久はとても強い男だ。だから意志が固い

明久はとても弱い男だ。だから人の気持ち分かる

バカだが、こんな明久だからこそ、香奈を励ますことが出来たのだ

「二人共遅刻だ！走って教室まで行け！」

西村の声が響く

『はい！』

二人の重なった声が響く

二人が消えた校舎を見ながら西村が呟く

「頑張れよ、二人共…」

西村の小さな声は、春の微風にかき消された

坂道と桜並木とプロローグ（後書き）

楽しんで頂けましたか？

出来れば感想よろしくお願いします！

批判も受け付けています！

これからもどうぞよろしくお願いします！

バカと仲間とFクラス(前書き)

すみません、島田アンチです…

バカと仲間とFクラス

「うわ…。これが教室…？」

「凄いねえ…。」

二人は思わず足を止める

それもそのはず、彼らが見ているのはAクラスだ

Aクラスは設備が充実していて、教室というより、ホテルという方がしっくりくるぐらいである

目眩を覚える程の教室だ

「あれはシステムデスク…。あれは個人クーラー…。」

「吉井、あれつてもしかして冷蔵庫…？」

「もしかしなくても冷蔵庫だよ…。」

「しかもあの人たち…。あれを当然の様に扱ってる…。」

「仕方がないよ…。社会じゃ、成績が全てなんだし…。」

「…もう行こ！なんか気分悪くなってきた！」

「だね」

返事をしながら明久は、思わず苦笑いを浮かべていた

「うわ…。これが教室…？」

「凄いねえ…。」

思わず、先程と同じ言葉を吐いてしまっくらい衝撃的な教室がそこにはあった

それもそのはず、彼らが見ているのはFクラスだ

思わず目を覆いたくなるほど汚い外観

さらに少し異臭がする
違う意味で目眩を覚える程の教室だ

「なんか違う意味で気分悪い！」

「もういいや…。さっさと入ろう？」

「うん」

そして明久は異臭のする戸を開ける

「すみません、遅れちゃいました」

「ん？明久。お前Fクラスなのか？」

「あれ、雄二？雄二もFクラスなの？」

「おうそうだ。点数をちょっと調整してな。俺はこのFクラスの代表だ。」

「へえ、そうなんだ。」

明久の後ろから、ひょいと出てきた香奈が口を挟む

「坂本…何が目的？」

「うお！金城！？なんでここに！」「Fクラスだからだよ…。ちょっと体調が悪くてね…。それで明久も…」

「ああ分かった…それ以上言わなくて良い」

「うん…」

雄二は何があつたかを察し、香奈にそれ以上を言わせなかった

「それはそうとして。本当になんでFクラスに。しかも面倒くさそうな代表に。」

明久の問いに雄二は口元を釣り上げる

「そりゃあ代表って言ったら、一つしかないだろ」

「やるの？坂本。試験召喚戦争を」

「ああ勿論だ！」

試験召喚戦争。通称、試召戦争

試召戦争とは要するに、設備を賭けた、成績で戦う成績である上位クラスが下位クラスに負ければ、設備を入れ替えることになる。また、下位クラスが上位クラスに負ければ設備を一段階落とされることになる生徒たちはより良い設備を求め、成績を向上する。それが文月学園の試召戦争の目的である

「まあそれは後で聞くよ。雄二、席は決められてるの？」

「いや、自由席だ」

「じゃあ吉井！あっちに座ろ」

「はいはい」

「さて、じゃあ俺もそろそろ座るかな。明久、隣良いか？」

「良いよー」

「いや金城が答えないでよ。別に良いけど」

三人が席についてすぐに、教室の戸が開いた

「えー、おはようございます。Fクラスの担任を務めます…」

担任らしい教師は、薄汚れた黒板に視線をやり手を伸ばそうとして…視線を皆の方に戻した。

「福原慎です。よろしくお願いします」

その光景を見て明久たちは驚愕する

「おいおい、チヨークすらないのかよ」

「ここまで酷いとは…」

「諦めるしかないよ…」

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば、申し出てください」

「むしろ不備しかないだろ…」「しっ！」

「俺の座布団、綿が入ってないんですけど」

「我慢してください」

「俺の卓袱台、脚が折れてます」「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

「学校の悪意が見えるよ…」

「ここまで差別されるとなんか…」

「気持ち悪い…」

この学校の圧倒的な学歴主義に香奈は嫌悪感を催す

「では必要なものがあつたら、極力自分で調達する様にしてください。それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

福原の言つとおり、廊下側の一番最後に座っている生徒が立ち上がった

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある。今年1年、よろしく頼むぞい」

「あ、秀吉だ」

「こいつも使えそうだな」

「坂本…凄く悪そうな顔してるよ…」

秀吉は男とは思えない程の可憐な姿をしている
秀吉も一年の時から明久たちと交流があり仲が良い

「……土屋康太」

康太は全体的な成績は悪いが、保健だけは他者の追随を許さず、保健の成績は学年で一位を欲しいままにしている
彼もまた、一年の時から明久たちと仲が良い

「ムツツリーニもだ…」

「こいつもまた…」

「坂本…」

「でもやっぱり女子がないねえ」

「もしかして、女子は私一人…?」

「おい、ちょっと待て。次は女子みただぞ」

「……です。海外育ちで日本語は会話ができるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

とある女子は一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です」

「し、島田さん…」

彼女の名前は島田美波

一年の時から明久たちと交流があり仲が良い
ある一名を除いて…

「ハロー」

「ははっ…」

明久は不吉な言葉に背筋を凍らせていた

隣で雄二は苦笑い

そして香奈は怒りに震えていた

そして香奈の出番が回ってきた

「金城香奈です。趣味は色々、特技も色々。嫌いなことは差別、嫌いな物は爬虫類、嫌いな者は暴力を振るう人です。」

香奈は美波を睨みながら、そう言い放った

バカと仲間とFクラス（後書き）

これからも頑張りますので、よろしくお願いします！

嫌悪と偽悪者と学年次席（前書き）

香奈だけじゃ力不足だと思い、オリキャラを一人増やしました！

結果、オリキャラ無双になってしまいました…
反省しています…

嫌悪と偽悪者と学年次席

睨まれた美波は、香奈に憎しみの籠もった眼で睨み返した
二人の間に流れる不穏な空気に、Fクラスは静まりかえる

香奈と美波はお互いの存在を快く思っていない
美波は、いつも明久の近くにいる異性である香奈を、恨めしく、妬
ましく思っている

香奈は、大事な友人である明久に、いつも理不尽な暴力を振るう美
波を、ただひたすら嫌悪していた
この空気を変えたい明久は、二人の間に割って入る

「ほらほら二人とも！僕が自己紹介するからちゃんと聞いて！」

明久に言われ、二人は渋々視線を他に移す

しかし、睨み合いが終わったからといって、クラスの空気が変わる
わけではない
空気を変えようと必死な明久は、軽く咳払いをし、練りにねって考
えた渾身の自己紹介をする

「え〜っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださ
いね」

そう、渾身の自己紹介だ

『……………』

効果があるとは限らないが…

「うっう…」

「頑張ったな、明久…」

「私が呼んであげるからそれで我慢して、ダーリン」

「そういうことじゃないんだ…。そういうことじゃないんだよ…」

どうしてあんな自己紹介をしたのか、良く分かっていない香奈だった

そのとき突然戸が開き、少し高めの男の声が響いた

「すみません 遅れちゃいました」

声を発した男は、背が少し低めで、これといった特徴のない黒髪と、いかにも普通の男子高校生であった

彼の微かにだが放つ、異様な空気を除いては…

「ああちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、端梨くんもお願いします」

「分かりました 僕の名前は端梨人巻と言います！僕は自分のことを、素直で純粋な人間だと自負しています！これから一年、同じクラスで頑張りましょう！みなさん、よろしくお願いします」

人巻は言い終えると、誰の反応も待たず、明久の席の前まで歩き、そして座った

「やあダーリン」

「聞こえてたの!？」

「うん」

「はあ…。それよりさっきの自己紹介、何が素直で純粋な人間だよ。全然違うじゃないか」

「そうかな？僕は自分のことを、素直で純粋に嘘を吐く人間だと自

負しているよ」

思わず明久は溜め息を吐く

「そんなことより人巻。なんでお前がFクラスなんだよ。お前ならBくらいに行けたろ」

「それは君もだろ？雄二くん。僕の場合はちょっと暇だったんでね。面白い人たちが居そうだからっていう理由しかないよ。明久ちゃんたちがFクラスなのは分かってたしね。同じ教室でテストを受けてたから」

「なるほど、お前らしい」

「だろ？僕のモットーは名前の通り、『恥も無く人を巻き込む』だからね」

「親はそういう意味で名前を付けたんじゃないと思うんだけど！」

「あははっ そうだね、金城さんの言うとおり！」

「もうっ！」

香奈の反応を見て、人巻は笑い声を上げる

明久たちもつられて笑い始める

人巻は一通り笑い終えたようで、一息を入れてからまた口を開く

「そういえばさっき、珍しい人が遅刻してるのを見たぜ。まあ、僕も一応急いでいたから、走って抜かしちゃったんだけど」

「ふーん。その子って誰？」

「えーっとねえ」

人巻が名前を言おうとしたその時、戸が開いた

そして、桃色の長い髪をなびかせた女子生徒が、息を切らしながら入ってきた

「ほら、あの子だよ」

その姿に、大半の生徒が、驚きを通り過ぎて声が出ない様な状況に陥っていた

「え…。あの子ってまさか姫路さん!？」

明久が驚きの声を上げる

「え、よ、吉井くん!？」

姫路と呼ばれた女子生徒も、驚きの声を上げる

「違うよ、ダーリンだよ!」

人巻は余計な茶々を入れる

「人巻は余計なことを言わないで!」

至極真つ当なツツコミである

「ああちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんをお願いします」

「凄いな。人巻のときと名前のところ以外、一語一句同じだよ…」

「作者が楽してるだけでしょ?」

「メタ発言は止めて」

「その発言もメタ発言だけだな」

「三人とも!」

『はい…』

声を荒げて話し合う四人
実に迷惑である

「あの…、もう良いですか…?」

「はい！大丈夫です！」

「ええと、姫路瑞希と言います。よろしく願いします！」

「はいっ、質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

「先生！イジメは良くないと思います！」

『違うから!!』

傍から見れば人巻の言うとおり、イジメを予感させる質問ではあったが、ほぼ全員がそう思っていた事だった

瑞希は容姿も人目を引く程で、テストでは一桁の順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった

「わたしは振り分け試験中に熱を出しちゃって…」

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

「分かるかい明久ちゃん。僕らはこいつらと同レベルなんだぜ」

「悲しいこと言わないでよ…」

明久たちは無性にやるせなくなった

「で、ではっ、今年一年よろしくお願いします！」

瑞希は逃げるように、香奈の前の席に着いた

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしまっ

「き、緊張しましたあ…」

「大丈夫？姫路さん」

「よ、吉井くん！だ、大丈夫、です！」

「そっか！良かった」

そして明久は瑞希に微笑みかける

ここまで天然たらしという言葉が合う人物は、他にいるだろうか
思わず瑞希は吐息を漏らす

「流石だね、明久ちゃん！そこにシビれる！憧れるう！」

「何が!？」

「吉井ってやっぱり凄いね…。やり過ぎないようにね？後ろから刺
されちゃっよ？」

「なんで!？」

「本当に気づいてないんだな…」

「何に!??」

瑞希を交えて五人で騒いでいると、前の方から何かを叩く音がした

「はいはい。その人たち、静かに」

福原が注意を始めるが、叩いた教卓が音を立てて崩れてしまった

「してください…ね？」

本人としては、軽く叩いたつもりだろう

しかし、壊してしまった事実は変わらない為、少々気まずそうな顔をする

「えー。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしてくださいね」

福原は気まずい顔をしながら、教室を後にする

「…ねえ、雄二。ちよつと良い？」

「別に構わないぞ」

「じゃあちよつと外で」

「真剣な話か？」

「うん」

「分かった」

「何？愛の告白？」

人巻の適当な戯れ言をスルーし、二人は真剣な面持ちで教室を後にした

嫌悪と偽悪者と学年次席（後書き）

見苦しかったかもしれませんが、これからもよろしくお願いします
！

意地とFクラスと試召戦争（前書き）

感想をくださった方々ありがとうございます！

これからも精進していくのでよろしくお願いします！

不快になる内容が入っていますが、読んでいただければ嬉しいです

…

意地とFクラスと試召戦争

「それで、話しててなんだ？明久」

「うん。さつき、試召戦争の話をしたじゃない？」

「ああ」

「目標をAクラスに変えて欲しいんだ」

明久の発言に雄二は目を細める

「…まゝた誰かの為か？」

「そういう訳じゃないんだけど…」

雄二の発言に明久は目を泳がせる

「嘔吐くな。じゃなきゃお前が試召戦争なんて言い出す訳がないだろ」

「いや、本当だよ！FクラスとAクラスの教室を見たらさ！」

「さつきと理由を話せ。金城も姫路もここにはいねえよ」

「どうして分かったの…？」

「顔に出るんだよ。お前は」

「そうなんだ…」

明久が一人納得していると、雄二がさつきとしろと急かし始めるので、明久は理由を話し始める

「姫路さんって体が弱いじゃない？だからこんな環境の悪いところじゃ、体調を崩しちゃうかもしれないし…しかも、元々Aクラスに行ける実力があるのにこんなんじゃない可哀想でしょ？」

「ああ、確かにそうだな。で、どうして金城の為なんだ？」

そっちが本題と言わんばかりの口調で、明久に尋ねる
それは仕方がないだろう。明久が、どうして姫路の為に頑張るかは
想像がついていたからだ

雄二の問いに、明久は口を開いていく

「金城がさ、Aクラスの人たちを見て不機嫌になってたんだよ…」

「ほう？それはどうしてだかお前には分かるか？」

「…多分だけど良い？」

「ああ勿論だ。聞かせてみる」

「えっとさ…、Aクラスの人たちってAクラスの教室を勉強で勝ち
取ったんだよね…？」

「ああそうだな」

「でもさ、世の中勉強が全てじゃないでしょ…？運動を頑張る人も
いれば、秀吉みたいに演劇を頑張る人もいる…」

「……」

「けどこの学校は、勉強だけで教室の設備を決められて他の努力
を認められない…。そしてAクラスの人たちはその設備を当然の様
に使っている…。そこに腹が立つたんじゃないかな…」

「要するに、他の人も色々と努力をしているのにそれを認めず、勉
強だけが全てだと信じているAクラスの奴らとこの学校に腹を立て
てるってことか？」

「…多分ね」

「それは詭弁だな。そう思っている人も少しはいるかも知れないが、
全員がそう思ってる訳ではあるまい。僕はそう思うね」

いきなり現れた人巻がそう言った

「お前、いつからそこにいた…」

「だが金城さんの意見にも一理ある。そう思われるほどAクラスの人たちの態度は大きかった。僕がさっき見たときなんて、優雅に力ツプで紅茶を飲んでたぜ」

「聞けよ！」

「ん、なんだい？」

「…はあ、もういい。安心しろ明久。俺の狙いは最初からAクラスだ」

「へ？EクラスとかDクラスじゃないの？」

「ああ、目的はお前と一緒にだ。学力だけが全てじゃないってことを証明したくてな」

雄二が口の端を吊り上げる

「証明したいなら論文でも書けば？」

人巻も口の端を吊り上げる

「はいはい、人巻も人を煽らない」

「僕の生き甲斐を奪わないで！」

「嫌な生き甲斐だな…。話しも終わったし二人とも、中にはいるぞ」

そして三人は教室の中へと入っていった

「三人とも遅かったね。何してたの？」

香奈が不安そうに三人に尋ねる

「ああそれはね、パンツの話をしてたんだ」

「へ？」

思わず香奈は間の抜けた声を出す

「ちよつ！人巻！勘違いされる様なこと言わないでよ！」

「僕たちはこれでも男子高校生だからね。パンツに夢中なんだよ。やっぱり時代はパンツだね。口に出すだけで興奮するよ。パンツだって他の服と同じでただの布なのに、どうしてあんなに興奮するんだろうね？人類の永遠の謎だよ。この謎が解けたなら或いは、世界中の戦争がなくなるかもしれないね。やっぱりパンツは凄いね。Yesパンツ！おつと話しが逸れたね。『どんな話しをしてたか』だよね。主に話してたのはパンツの色の話しかな？どの色もそれぞれの魅力とエロスが宿っているよね。十人十色とは正にこのこと。こちらからは十人十色ではなく、十パンツ十色にするべきだね。そっちの方が絶対に意味が通じやすいもの。おつと、また話しが逸れてしまったね。いやぁ失敬失敬。パンツの話しを始めると我を忘れちゃうんだ。饒舌にもなるね。そう、色の話しだったね。明久ちゃんとうん。雄二くんは、白に一番魅力を感じるみたいだよ。うん、その気持ち凄く分かるよ。白は凄く清楚な感じがするよね。汚れなき乙女って感じだよ。そしてその汚れないものを自分色に染める。そそのね。唾液が湯水のように溢れ出てくるよ。だけど僕はやっぱり黒が良いな。何？とてもエロい感じがするって？バカやろう！フザケたことを抜かすなよ、このド三流が！！エロそうな人が身に着ければ確かにエロく見えるさ。だけどエロくなさそうな人間が身に着ければ黒もまた清純な色となる！このエロスと清純の二刀流。完璧じゃないか……。だがパンツには……」

『なげえよ！！！！』

明久と雄二の絶叫が、Fクラスに響いた

「おいおい、あまり大声を出すなよ。周りに失礼だろ？」
「ずっとパンツの話しを聞かされる方の身にもなれ！！」
「…ああなるほど、アソコがハイパーフルバーストということか」
「違うわ！」
「吉井、本当にパンツの話しをしたの…？」
「人巻の嘘に決まってるでしょ！！？」
「ウルサイですよ、皆さん」

いつの間にかに帰ってきていた福原に怒られ、教室はまた静かになり自己紹介が再開した

自己紹介は順調に進んでいき、最後の雄二の番になった

「えーと、坂本君、君が最後ですよ。クラス代表でしたよね？前に出てきてください」
「了解」

そう言い雄二は立ち上がり教卓の前に向かった

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

そしてここで雄二は一つ咳払いをし、声の調子を調える

「Aクラスは超豪華待遇らしいが……不満はないか？」
『大ありじゃああああ！！！！』

Fクラス全員が叫び、教室に声が響きわたる

確かにここまでの差だと、不満がない方がおかしいだろう

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ」

「いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！」

「Aクラスだって同じ学費だろ！？」

「女子高生のパンツがみたい！！」

「改善を要求する！！」

「ああ、そこで代表としての提案だがFクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！！」

こうして戦いの火蓋は切って落とされた

意地とFクラスと試召戦争（後書き）

不快になってしまった方、本当に申し訳ありません…
自分勝手ですが、これからも読んでいただければ嬉しいです…

バカと理由とDクラス(前書き)

遅くなってすみません…

少し書き方を変えました

バカと理由とDクラス

「勝てるわけがない」

「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

「そんなことよりパンツだ！　パンツが最優先だ！」

「人巻はちよつと黙ってて」

否定的な意見（変態発言も有り）で教室が満たされている中、雄二は余裕の笑みを浮かべている

やはり何か策があるのか。流石は元神童と明久は感心する

対して人巻も余裕の笑みを浮かべている

パンツのことでも考えているのか。流石は現変態と明久はある意味感心する

ある種、人巻はムツツリー二より、鼻血を出さない分危険かもしれない、と明久は実感する

「そんな事はない、必ず勝てが勝たせて見せる」

「何を根拠に」と、また否定的な意見が上がる

しかし雄二は話を続ける

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は辺りを見渡し、屈んでいるムツツリー二に目を向け、言葉を発する

正直明久は雄二の言葉より、何故ムツツリーニは屈んでいるのかの方が気になっていた

「おい康太、いつまで姫路のパンツを覗いているんだ？」

「ふえ！？」

「ちよつ！？ おまつ、パンツ覗いてたのか！」

ちよつとそこどけ！ 僕が覗く！……って、あああああ！ 姫路さんパンツを隠さないで！ お願いします！ どうか僕に慈悲を！！」

姫路は顔を真っ赤にしながらパンツを隠している

人巻は姫路に必死にパンツの素晴らしさを語って聞かせる

とてつもなく悲しい光景だった

明久は誓う。自分はあるのようにはならないようにしようと

「ていうか康太、いつまで首を振っているんだ」

明久は、人巻達に気をとられていた為気付いていなかったが、康太はずつと首を振っていたらしい
疲れないのだろうか

「……そんな事実は確認されていない」

「一人だけパンツを確認しやがって……」

パンツを見ることを諦めた人巻は毒づく

「……なんのことやら」

ムツツリーニはそっぽを向く

「はあ…。そんなことどうでも良い。土屋康太。こいつがああの有名な寡黙なる性職者だ」
ムツリーニ

雄二の言葉に周りはざわめき、ムツリーニは、また首を振り始めた

「馬鹿な…奴がそうかどうか？」

「見る！ まだ証拠を隠そうとしているぞ…」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

「吉井…前から思ってたけど、ムツツリーニって酷いあだ名だね

…」

「あはは…まあね。でも、ムツツリーニはそれだけのことしてるし

…」

「ね…」

「僕この前のテストで、『ムツツリーニ』の筈なのに、『ムツツリ
ーニ』って書きちゃったよ」

「あはは！ 吉井らしいね！」

「どういうことだよ！」

「そのままの意味だよ！」

「むう…」

「おい明久！ 金城！ 一応俺の話聞け！」

「ああごめん雄二。続けて」

雄二は咳払いをし、声の調子を調べ話を戻す

「みんなも姫路の实力は知ってるだろう。

姫路、お前はうちの主戦力だ。期待してるぞ」

「は、はい！ 頑張ります！」

「ああそうだ。うちには姫路さんがいるんだ」

「そうだな。姫路さんがいれば何もいらぬ」

「また何か言ってる人がいるね…」
「無視が一番だよ」

「端梨人巻。いつもはふざけたことしか言っていないこいつだが、
案外成績が良い。」

「大体Bクラス並だよな？」

「ああ、そうだぜ」

「お前もうちの主戦力だ。よろしく頼むぞ」

「良いぜ、坂本くん。試召戦争で活躍すれば、『キヤー端梨くん素
敵！ 私のパンツあげる！！』って展開になるかもしれないしね」

「悪いがそれは無いと思うぞ…？」

「ガーン…」

フザケて人巻は、落ち込むフリをする

雄二はそれを笑って受け流し、話を続ける

「木下秀吉。演劇部のホープで、あの木下優子の双子の弟だ」

「おお…あの木下優子の…」

「姉妹揃って可愛いぜ…」

「…姉妹って聞こえたんだけど…」

「放っておこうよ…」

「あ、そうだ。秀吉ちゃん、やっぱり優子ちゃんはAクラス？」

「ああ、Aクラスじゃったぞ」

「あれ？ 人巻と木下さんって知り合いなの？」

「ああそうだぜ。優子ちゃんの所為で僕はパンツ愛好家になっちゃ
ったんだ。」

その時の話、長くなるけど聞きたい？」

「いや、別にいいよ……」

明久は本当に長くなりそうだったので、遠慮をした

「話を戻すぞ」

「ああ坂本、ごめん……」

「問題ない。話を戻すが、勿論俺も本気を出す！」

「そう言えば坂本って昔、神童って言われてたよな！」

「じゃあAクラス並が二人もいるってことか！」

「坂本は……無理だな……」

「さつきから危ないことを言ってる人がいるけど……」

「さつきから言ってるけど触れないであげて」

「金城香奈。お前も重要な戦力だ」

「えええええ！？私ほみんなみたいに凄い能力を持ってないよ！？」

「だが全てにおいて平均以上だ。弱点がないって言うのはとても重要なことだ。よろしく頼むぞ」

「……………分かった」

「確かに結構可愛いな」

「彼女も良いな……じゅるり……」

「吉井…寒気がする」

「あはは…よしよし」

そう言い明久は金城の頭を撫でる

その瞬間、明久は背筋が凍るような殺気を感じた

その殺気を感じる方を向くと、そこには自分と金城を睨みつける島田がいた

金城も殺気を感じたのか島田の方を向く
まさに一触即発。そんな空気が二人の間に流れた

その時、教壇の方から大きな音がした

教壇の方を見ると、雄二は黒板に拳を置いている。

恐らく先程の大きな音は雄二が黒板を叩いた音だろう
密かに雄二に感謝する

「さて、今からこの試召戦争で一番のキーマンを紹介しよう」

雄二は自信満々に、そう言い放った

明久にはキーマンが誰なのか、まったく検討がつかなかった

姫路さんでもなく、雄二、人巻でもない。ならば誰がキーマンなのだろうと明久はひたすら疑問に思った

恐らく他のみんなもそうだろう

雄二は周りを見渡して、そのキーマンの名前を言った

「明久、お前だ」

「……………へ？」

みんなが頭に疑問符を浮かべる中、金城は一人納得がいったようで、仕切りに頷いていた

バカと理由とDクラス（後書き）

金城エ
…

全然目立たせられない…

明久と人巻と宣戦布告（前書き）

島田と秀吉とムツツリー二の出番が…

明久と人巻と宣戦布告

「えっ！　ちよっ、なんで僕！？」

雄二の発言に明久慌てふためきおののいた。

自分を過小評価しがちな明久は、何故自分がキーマンになりえるのかが全く分からないのだ。

「金城も頷いてないで何か言つてよ！！」

「？　坂本は何も間違つたことを言つてないよ？」

明久は考える。何故二人が手放しに自分のことを持ち上げるのかと。

（僕を持ち上げた後に貶して、辱めるつもりだな！！）

明久が出した答えは卑屈なものだった。

この答えに達した明久は、そうはさせまいと素早く行動に移る。

「ふっ…残念だったね二人共…。僕はその手には乗らないさ…」

雄二と金城からしてみたら意味が分からない。

雄二は、確かに他人を褒めること自体が珍しい為仕方ないかもしれないが、金城は良く他人を褒めるのだ。完全にとぼちりである。

「みんな！　僕はみんなに期待される様な人間じゃない！

何故なら僕は……観察処分者なんだっ！！！」

その言葉にFクラスは静まりかえる。

そんな中、姫路が声をあげた

「あの…観察処分者ってなんですか…？」

「ん？ ああ、姫路には全く関係ないことだし、知らないのも仕方がないな。」

「良いか？ 観察処分者っていうのは、学園でも類を見ない問題児に与えられる称号だ」

「言い過ぎだぞ雄二…！」

「仕方がないよ吉井…。あんなことをやったんだし…」

その言葉に明久も口を閉じる。明久が黙ったので、雄二に引き続き金城が説明を続ける。

「続けるね姫路さん。」

観察処分者にはある特権があるの。それはね召喚獣で人や物に触ることが出来るの」

「それって凄いいじゃないですか…！」

姫路の反応に、どこからともなく現れた人巻が言葉を返す。

「そうだね！ 召喚獣の力を利用してスカートをめくったり、パンツを奪い取ったり…」

「僕はそんなことしないよ…！」

「そりゃあそうだ！ 僕だって嫌だぜ！ 無理やり見たり奪ったりしたパンツは！」

さり気なく見えたりするのは良いよね！ 相手から見せてくれたりしたら神の領域だぜ…！」

ヤバい、また話がズレちまった…

まあ本題に戻すけど、そんな観察処分者にも勿論デメリットはあるんだぜ」

「……それはなんですか？」

緊張した面持ちで質問する姫路に、明久は微かに笑みを見せながら答えを返す。

「それはフィードバックだよ」「ま、要するに明久の召喚獣が攻撃を受けたら、明久自信にも痛みが来るって訳だ」

それなら一人戦えない奴がいるようなものじゃないかと、Fクラスの生徒たちは不満を漏らす。

明久もその不満に同意見だった。しかし雄二は否定する。明久はキーマンになりえると。

「明久は観察処分者だ。そして観察処分者は、召喚獣を用いて教師の手伝いをさせられる。それ故に、観察処分者は召喚獣を使う回数
が他の奴らに比べ圧倒的に多い」

「要するに何が言いたいんだ？」

須川が質問をするが、それに雄二は溜め息を漏らす。まだ意味が分からないのかと。

雄二が答えないので金城が代わりに答える。

「要するに、他の人より召喚獣の扱いに長けているっていう意味だよ」

しかも明久の成績はDクラス並だしね、と付け足す。

その答えにFクラスの生徒たちは感嘆を漏らす。

これは本当に勝てるかもしれない…、と。

そして雄二は皆を奮い立たせる為に声を荒げれる。

「よしお前ら！ 俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したい。皆、この境遇は大いに不満だろう！？」

『当然だ！』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー…」

雄二の声にFクラスは盛り上がり、皆は叫び、腕を振り上げていた。姫路は周りの空気についていこうとしているのか、微かに声を出し、微かに腕を振り上げた。

その微笑ましい姫路の様子に、明久と金城は微かに笑った。

「よし、誰かにDクラスへの死者になってもらいたい。

逝ってもいいという奴は拳手をしてくれ」

明久は少し字が違うように感じたがツツコミはしない。

誰も手を上げないのならば、明久が手を上げようとした瞬間、近くで手を上げる者がいた。

「誰も行かないのなら仕方がない。僕が行ってあげよう」

自然に手を上げ、自然に立ち上がった人巻は、自然に言葉を発した。全てを余りにも自然に、自然過ぎて寒気を感じる程自然に行った彼は、自然に教室から出ようとする。

そんな人巻に皆啞然としていたが、明久は人巻一人では危ないととつさに判断し、雄二に自分も行くことを告げ、人巻の後について行

った。

「おや明久ちゃん、君も来るのかい？」

「まあね。人巻一人じゃ危ないし」

「相変わらず優しいね。僕から君への愛は変わらずってところかな？」

「男からの愛なんていらナイよ……」

「空の愛！？そんなことないぜ！ 僕から明久ちゃんへの愛は、気持ちで満たされているよ！！」

「気持ち悪い！」

「気持ち悪いじゃなくてキモいって言うてくれたら、『何？ 気持ちが良いの？ どこが良いんだ、この変態！！』って罵ってあげたのに」

「全然嬉しくないよ！！！」

余りにもルーズな人巻に明久は不安になる。

下位クラスからの宣戦布告というのは危険なのだ。少しばかり武道の心得がある明久でも無事でいられるか分からないのに、人巻は大丈夫だろうか。だが、それをすぐに思い返す。

特に体格が良いわけでもない人巻だが、実は喧嘩慣れしている。当然だろう、性格が性格だ。人を見たらからかわずにはいられないような人間が、喧嘩慣れしていないわけがない。

明久と人巻は、既にDクラスの前にいた。

何故入らないのかと言うと……

「なんでだ！ なんでなんだ明久ちゃん！ 僕が先に入って危険を引き受けてやるというのに！！」

「だって人巻は絶対に喧嘩売るでしょ！？ そんな人に任せられない！！！」

「この分からず屋!!」
「どつちが!!」

明久は思う。このやり取り、何度目だろう、と。最終的に、じゃんけんで勝った人巻から先に中に入ったことになった。そして明久は思う。もしかしたら人巻は僕の思いに感化されて、全てを穏便に済ましてくれるかもしれない。人巻は言葉を扱うことに長けている。故に相手を煽ることも一流になっってしまうのだが。

明久の期待を背に人巻は戸を開けた。

「ご機嫌よう! Dクラスもといダメクラスの皆様!」
「僕の希望をへし折るところか粉々にするんじゃねえ!」
「うお! 明久ちゃん口調が変わってるぜ!」
「うるせえ! そりゃあ口調も変わるさ! Dクラスの人なんてずっこけてるじゃねえか!」
「だからダメクラスって言われるんだよDクラス」
「ねえ! なんでDクラスにはそんなに強く当たると!?」
「坊やだからさ...」
「それで全てが許されると思うな!!」

いつも通りの会話(漫才)をする二人にDクラスの間人が声をかける。

「えーっと...君たち何しに来たの...?」

その言葉に我に帰った二人は、同時にDクラスの生徒たちに向かい告げる。

『僕たちFクラスは、Dクラスに宣戦布告します!!』

二人は戦いの火蓋を切った。

明久と人巻と宣戦布告（後書き）

携帯使いにくい…

島田と金城と屋上（前書き）

御伏四さん、とーやさん、感想ありがとうございます！

睡魔が容赦なく襲ってくる中書いた為、おかしな部分が多々あると思います。

見つけ次第、連絡お願いします。

島田と金城と屋上

明久と人巻にとつての戦争は既に始まっていた。宣戦布告と同時に、Dクラスの生徒たちが明久たちに対し、狂気を放ちながら凶器を振り回し始めたのだ。

「おいおいヤバいぜ！ 誰だよこんなの持ってきたの！！」

「人巻！ いつもの余裕はどうしたの！？ 早くどうにかしてよ！」

「こんなバーサーカー共相手に、まーさーかー何か出来ると思っっているのか！」

「いつものキレはどうしたの！？ センスが酷すぎるよ！」

「うるせえ！！」

明久たちはお互いに文句を言い合いながら、右へ左へと体を傾け、時にはしゃがみ、時には飛び跳ね、必死に避けていた。埒が明かないと思つたのか、明久は試召戦争の時間だけ伝え、Dクラスは飛び出す。それに続いて人巻も飛び出し、二人はDクラスを後にした。

「おお！ 二人共無事だったか！！」

雄二は思わず安堵の声を漏らした。雄二の声に明久と人巻は苦笑いを返す。

「わしも心配したぞ…随分と時間がかかったんじゃない？」

「……何かあったか？」

秀吉とムツツリー二も心配していたのか、二人に質問を投げかける。

「おお！ 長らく出番が無かった秀吉ちゃんに康太ちゃん！」

「放っておいて欲しいのじゃ……」

静かに歩み寄ってきた金城が明久に声をかける。

「何か危ない目に合わなかった…?」

「金城もそんなに心配しなくて大丈夫だよ。秀吉もムツツリーニも」

「そうだよ。僕たちは雄二程では無いにしろ、かなり頑丈な方なんだぜ」

「分かってるよ!」

「金城さんの次のセリフは『それでも心配なんだよ!』だ!」

「それでも心配なんだよ!!　ハッ!」

人巻の予言通りに話してしまい、金城は思わず驚く。

「バアアアーン!!」

「口で効果音を付けなくて良いから……」

いつも通り奇行をする人巻。それに呆れながらもツツコむ明久。

「のう雄二。人巻が言ったネタがなんだか分かるかの?」

「ああ、あれはジョジョの奇妙な冒険って漫画のネタだよ」

「ふむ、今度貸してくれぬか」

「ああ悪い…俺は売っちまったんだ。ムツツリーニも持ってた筈だぞ」

「ムツツリーニはまだ持っているかの?」

「……今度貸す」

「感謝するのじゃ」

人巻が言ったネタに秀吉が反応し、雄二とムツツリーニと共に雑談

を始めた。

とてもありふれた光景だ。

そんな賑やかな輪の中に姫路が笑いながら入っていく。勿論、明久たちは歓迎する。

しかし、その輪の中に入らず、ただひたすら睨み続ける島田の姿がそこにはあった。

「よし、お前らミーティングに行くぞ」

「え？ どこに行くの？」

「屋上だ。明久、試召戦争の時間はちゃんとやってきたな？」

「うん、言ってきたよ。ていうことはミーティングと昼食を同時進行かな？」

明久の問いに雄二は頷く。そして、こちらを睨みながら立ち尽くしている島田に声をかける。

「おい島田。今から屋上で飯を食うんだが、お前もどうだ？」

その誘いに、島田は内心とても喜んでいた。

何せ想い人と一緒に昼食をとることが出来るのだ。

女性なのに、いつも明久と共にいる自分の嫌いな人物もいるが、背に物は変えられない。

島田は即座に頷いた。

しかし、その瞬間金城の顔が曇った。

大事な友人である明久に対しすぐに暴力を振るう、あの島田と一緒に昼食に来ると言うのだ。

金城は顔を曇らせたまま、雄二に言葉をかけた。

「私は、いいや…」

後でどんな作戦か教えて…」

それを告げると同時に金城は教室を出て行く。
その言葉に雄二はまだ早かったかと後悔した。

雄二は、クラスの代表として、そして友人として、二人にあまり険悪な仲であつて欲しくなかった為、強行手段に出たのだがそれは失敗に終わった。

そんな雄二とは裏腹に島田は歓喜した。好きな相手と昼食を食べられる上、いつも好きな人と共にいる嫌いな相手が消えたのだ。そして島田は思う。これで吉井と一緒にいる時間を誰にも邪魔されないだろうと。

「はあ… 明久ちゃん、ガキ臭いと思わないかい？」

「あはは… しょうがないよ、多分僕の所為だし…」

人巻は明久の目を見る。その後明久に微笑みかける。

「金城さんのところに行きたいんだろ？ なら行くべきだよ」

「人巻…」

明久は感心する。何故人巻はこうも人の心が分かるのだろうか。

そして明久は人巻の言葉に背中を押され、雄二に金城のところに行くことを告げ、教室を出て走っていく。

「金城さんがどこに行ったか分かるんでしょうか…」

姫路の言葉に秀吉は微笑みながら答える。

「あの二人は大丈夫じゃ。いつも一緒におるからのう」

秀吉の言葉にムツツリー二も頷く。
秀吉たちは本当にあの二人なら大丈夫だと思っ
ているのだろう。周りから見ても分かる程、信
頼し合っている二人、まあ金城にだが、姫路
は少しばかり嫉妬した。

島田は明久が出て行った戸を眺めたまま、呆
然と立っていた。そしてまた怒りが湧き上が
ってくる。金城を追いかけた明久に、そし
てそこまで想われている金城に。

「なんで…なんで金城ばかり…!!」

島田の憎しみのこもった呟きは、幸か不幸か
誰の耳にも入らなかった。

今明久が立っているのは、今は既に使われ
ていない空き教室だ。不気味な雰囲気を出
している所為か、人が殆ど近寄らない場
所である。それと同時に金城が一人でいた
時に、良く来る場所である。それを知って
いるのは本人と明久だけだ。

「ふう…やっぱりここにいたんだ」

金城は後ろからかけられた声に振り向く。

「別に来なくても良かったのに…」

勿論そんなことは思っていない。金城は
ずっと明久を待ち続けている。その証拠に、
金城は弁当に一切手をつけていない。恐
らく、明久が来なくてもずっと待ち続け
ていただろう。

明久は勿論気付いていたが、そのことは話さない。

「ごめんね…いきなり出てきちゃって…」

「仕方がないよ。でも島田さんには無理だとしても、雄二には謝りなよ？」

「うん…分かってる…」

その言葉に明久は微笑む。

そんな明久に金城は思う。やはり吉井は信頼出来ると。

金城にとって明久が来るかどうかは五分五分だった。

それでも待ち続けた。明久が金城の元に来れば、明久は島田に暴力を振るわれなくて済み、金城は島田と一緒に昼食をとらなくて済むからだ。

しかし、明久は言う。

「金城、雄二たちのところに行こう？」

その言葉に金城は呆然とし、「何故？」と問いかける。

その言葉に返ってきた答えは至ってシンプル、しかしとても明久らしい答えだった。

「だって皆で食べた方が美味しいし！」

その答えに金城は思わず笑ってしまう。しかし何故か納得した。吉井が言うならそうなんだろうな、と。

そして、金城は精一杯の笑顔で頷いた。

明久は屋上の戸を開き、皆声をかける。

そして明久と金城は皆を見て驚いた。
誰一人として昼食を食べていないのだ。

二人が何故驚いているのか気付いた雄二がそっぽを向き、そして口を開く。

「ミーティングに集中してたからな」

そんな雄二に人巻はいつも以上にニヤニヤしながら言葉を返す。

「男のツンデレは流行らないぜ」

その言葉をきっかけに、二人は言い争いを始めたので明久たちはどんな話をしていたか秀吉に尋ねることにした。

「ねえ秀吉、どんな話してたの？」

「うむ、何故最初がEクラスではなくDクラスなのかという話じゃ」

「へえ、どうして？」

「雄二が言うには、Eクラスには絶対に勝てるらしいのじゃ」

「うん、まあ姫路さんも坂本も端梨もいるしね」

「だから、まずは絶対に勝てるとは限らないというDクラスから攻めるらしいのじゃ」

「多分雄二のことだから、Dクラスの設備を取らない代わりに、何か別のことをするのかな？」

「そこまでは言っていなかったので確信は出来んが、大方当たりじゃろうな」

そこに、不毛な言い争いを終えたららしい雄二が来た。

「ああ、そつだ。よく分かったな」

その言葉に二人は笑い、そして言う「バカにするな」と。
そこで金城が言い忘れていたことを思い出し、雄二に言う。

「ごめんなさい!!」

「ん？ なんのことだ？」

雄二はとぼける。しかしその言葉に、金城は少なからず救われた。

そこに、先程までと変わらず不機嫌そうな島田が口を挟む。

「でも本当にDクラス、ましてやAクラスに勝てるの？」

しかし雄二はその言葉に自信に溢れた笑みを返す。

「安心しろ。俺たちのクラスは、最強だ!!」

その言葉にそこにいたメンバーは各々の反応を示した。

そしてそこからは平穏な会話。秀吉を除く男性陣が、以外なことに料理が上手なこと。

それに対抗意識を燃やした姫路が、明日は全員分の弁当を作ってくれるということ。

たわいもない会話だが、とても微笑ましく、とても和やかな、平和な会話。

しかし試召戦争は、もう間近だ。

島田と金城と屋上（後書き）

感想とは本当に嬉しいものですね！
出来れば感想をお願いします！

FクラスとDクラスと試召戦争（前書き）

ジャーニケルさん、御伏四さん、朝日さん、感想ありがとうございます！

遂に戦争開始です！初めての戦闘描写なので上手く出来ているかわかりませんが、よろしく願います！

FクラスとDクラスと試召戦争

昼休み終了のベルが鳴り響く。このベルの音を合図に試召戦争が始まる。

「野郎共！ Fクラスのバカの意地を見せてやれ！！」

『おおっ！！！！』

雄二の喝にFクラスはとてつもない盛り上がりを見せる。そして代表である雄二の近くに約十名の生徒を残し、他の生徒は三部隊に別れ教室を出て行動を開始する。

試召戦争は途中で回復試験を受けることができ、Fクラスにはもう既に回復試験を受ける者が四名もいた。

明久、金城、人巻、姫路である。

「早速テストだなんて、ついてないよ……」

明久は思わず愚痴を漏らす。

「全くだ。だけど一教科だけで良いんだから堪えようぜ」

「でも間に合うかなあ……」

明久の不安を消し飛ばす様に人巻は笑う。

「大丈夫だろ。何せこっちには島田さんがいるんだ」

場所は変わって渡り廊下。

Fクラスは島田を中心にDクラスと均衡していた。

「くそっ！　なんでFクラスの癖にこんな奴がいるんだよ！！」

Dクラスの生徒が叫ぶ。無理もないだろう。圧倒出来ると思っていた相手と均衡しているのだ。

その結果、Dクラスは勝利を焦り隊列が乱れ、徐々に押されていくこととなる。

しかし、ある人物が現れ状況が一変する。

「あつ、そこにいるのはもしやお姉さま！　今そっちに行きますわ！！！」

「げっ、美春！」

戦争では一瞬の油断が命取りだ。そして今、島田は清水の声を聞き、焦り油断をしてしまった。

「もらった！！」

Dクラスの生徒の声が響く。Fクラスの近藤は、島田がここで戦死してしまつたら、勝つことが出来ないことを悟り、島田を庇い戦死する。

島田はその光景に啞然とした。

自分が油断をしてしまった為、大事な仲間を殺してしまったのだ。戦死した近藤が、鉄人に抱えられて補修室に連行されていく姿を見て、Fクラスの生徒たちは動揺する。

自分も戦死したらあなるのかと。

先程までの盛り上がりが嘘のように静まり返り、FクラスはDクラスに押されていく。

「もう逃げられませんか！ さあお姉さま、私と保健室へ！」
「嫌よ美春！ ウチはあんたと戦う！」

島田と清水はお互いの武器をぶつけ合い、そして鏢競り合う。戦争は激化していく。しかし、戦争はまだ始まったばかりだ。

また場所は変わりFクラス。

雄二がムツツリー二に、今の戦況を聞いていた。

「ふむ。それで清水って奴は倒したのか？」

「……島田が倒した」

「よし、人巻。テストは終わったか？」

「今終わったぜ」

「なら今すぐ渡り廊下に行ってくれ」

「分かった、褒美はパンツで良いぜ」

「ん？ 俺のパンツで良いのか？」

「……やっぱり何もいらぬ……」

「分かってもらえて何よりだ」

人巻はトボトボと教室を出て行った。

「ムツツリー二、今の内に秀吉だけを一階に降りさせてやってくれ。勿論バレないようにな」

「……分かった」

その命令を聞き、ムツツリー二は教室を出て行く。

「相変わらずムツツリー二の動きは凄いね」

「スパイとか忍者みたいだね」

明久と金城はテストが終わった様で、雄二に歩み寄っていった。

「お前らも終わったか。姫路、お前はまだか？」

「はい！ 今終わりました！」

「よし、じゃあ姫路は俺が合図するまでここで待機。明久と金城は渡り廊下まで行ってこい。だが、戦いには参加するな」

「分かってる。合図があったら…だよな？」

明久は不敵に笑う。雄二も明久の言葉を聞き、同じように笑う。

「ああそうだ。行ってこいお前ら！！」

雄二は二人に喝を入れる。

『おう！！』

二人は勢いよく教室から飛び出した。

ここは渡り廊下。そこでは先程より激しく戦争が行われていた。しかもFクラスを中心に。

「なんだよ！ あいつらFクラスじゃないのかよ！！」

先程まで中心で暴れ回っていた島田は、点数をかなり消費してしまった為一步身を引き、代わりに人巻が中心となり場をかき回していた。

「どうしたどうした！ そんなに油断しているとスカートが捲れちゃ

うぜー！ パンツが見えちゃうぜー！！」

大声で叫びながら戦う人巻に、島田は思わず溜め息を吐く。

「おい島田さん！ 約束のパンツ、忘れないでよー！！」

島田は耳を疑った。

「はぁあーっ！？ そんな約束してないでしょ！？ 嘔吐かないでよー！！」

「おいおい、そりゃあ無いぜ！ じゃあなんで僕は戦ってるんだ！？」

「勝つためでしょ！！」

「パンツの無い勝利なんていらない！！」

「フザケないでよ！！」

「僕は至って真面目だぜ！！」

二人のやりとりを聞きながらDクラスの生徒たちは、今なら人巻の隙を突けるかもしれないと思い、人巻を凝視した。

しかし人巻は隙を見せない。

必死に人巻を睨み続けるDクラスの生徒たちを、人巻は笑い口を開く。

「そんなに睨んでも、パンツは見えないぜ？」

余りにも戦場に似合わない言葉。しかしその言葉は、人巻の余裕を表している様にも見え、Dクラスの生徒たちの焦りは急激に加速する。

焦るDクラスの生徒たちに、新校舎の方向から喝が飛んでくる。

「お前ら！ Fクラス如きに何をもたもたしてるんだ！」

その声の主は、Dクラスの代表である平賀のものだ。

恐らく、戦争が余りにも長く続く為痺れを切らし、近衛兵と共に前線に出てきたのだ。

「やあ。誰かと思えばダメクラス代表の平賀くんじゃないか」
「ああ、あのときの奴か」

二人は睨み合う。しかし睨み合いも、長くは近づかなかった。
一階から声が聞こえたからだ。

「もう少しで勝てる！ 代表を打ち取れ！！」

そう、Fクラス代表である坂本雄二の声だ。

「おい！ あれってFクラス代表の…」
「間違いないのか！」
「ああ、去年同じクラスだったからな！」
「よし！ C班、一階にいる坂本を打ち取れ！」
『おう！—！』

平賀の命令に十名程が一階に降りていく。

「良いのかい？ ここの人数を減らして」
「構わないさ。勝つのはDクラスだ！」

その言葉にDクラスは盛り上がり、Fクラスも負けじと盛り上がる。
戦争の終わりに近い。

場所は一階。

Dクラスの生徒たちは戸惑っていた。

一階にいたのは秀吉とムツツリー二だけだったからだ。

「おかしい…さっき坂本の声が聞こえたのに…」

「もしかしてこの声か？」

その声にDクラスの生徒たちは驚く。雄二とは似ても似つかない秀吉が、雄二と同じ声を出していたからだ。

「くそっ！ さっさと倒して戻るぞ！！」

「誰をさっさと倒すって？」

Dクラスの生徒たちは、いきなり後ろから声が聞こえた為驚いた。後ろには明久と金城が立っていた。

「余り私たちが舐めないでよ？行くよ、吉井」

金城の声を引き金に、一階での戦いが始まった。

場所は渡り廊下。

平賀は焦っていた。Fクラスの力が予想以上に強く、近衛兵を戦場に差し向けてどうにか均衡を保っているのだ。

そんな時、突如歩み寄って来たピンク色の髪をした生徒に声をかけられる。

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？」

「えっと…Fクラスの姫路瑞樹です。よ、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その…Dクラス平賀くんに数学勝負を申し込みます」

「……は、はあ。どうも」

「え、えっと…試獣召喚です」「…あ、ああ。試獣召喚…」

平賀は未だに何が起きているか分かっていなかった。そんな平賀に
姫路は申し訳なく思う。

『数学 Fクラス 姫路瑞樹 399点 VS Dクラス 平賀源
二 129点』

「え？ あ、あれ？」

「…ごめんなさいっ！」

謝罪の言葉と共に、姫路の召喚獣は大きな剣を振るい平賀の召喚獣
を斬り伏せる。

この瞬間戦争は終了し、Fクラスの勝利で幕を下ろした。

FクラスとDクラスと試召戦争（後書き）

誤字や読みにくい箇所があったら、是非教えてください。
ご協力お願いします！

取引とFクラスとAクラス？（前書き）

御伏四さん、ジャニケルさん、感想ありがとうございます！
短い上に、眠い中書いたので色々おかしいかもしれません。
違和感を感じたら報告ください。修正しますので。

取引とFクラスとAクラス？

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ！！』

その報せにFクラスは歓喜の雄叫びを、Dクラスは悲鳴をあげる。そのとてつもない音量を誇る絶叫は、校舎内を駆け巡った。

Fクラスの生徒はそれぞれ中心として働いていた生徒を褒め称え、Dクラスは代表である平賀を貶していた。

そんな中、一人だけ平賀に謝る者がいた。姫路である。

「あ…その、さっきはすいません…」

心から申し訳なさそうに謝り続ける姫路に、平賀は片手を上げそれを止める。

「謝ることはないよ。Fクラスだと舐めてかかった僕が悪いんだ。姫路さんが謝ることじゃない」

平賀は、Fクラスの生徒たちに英雄扱いをされ囲まれている雄二に声をかける。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はもう既に遅い。作業は明日でも良いかな？」

平賀の悲しげな顔にFクラスの生徒たちも流石に同情する。

新学期の初日から、底辺のクラスであるFクラスに試召戦争を挑ま

れ、その上負けてしまったのだ。平賀は最低三ヶ月間は、あの底辺の教室で恨まれながら過ごさなければならぬのだ。

「坂本、勿論明日で良いよな」

須川は平賀を気遣う様に雄二に尋ねる。しかし雄二は首を横に振る。

「明日とかそれ以前に、俺たちはDクラスと設備の交換をするつもりはない」

その言葉に皆驚愕する。

他の人より一足早く冷静になった須川が文句を言おうとするが、人巻がそれを遮る。

「落ち着けよ須川くん。僕たちの目標はここじゃないんだぜ？」

「しかしっ……！」

「『しかし』も『かかし』も『パンツ』もねえよ。」

だってお前ら、Dクラスの教室を手に入れたら、『もうここでいいや』って妥協しちゃうだろ？」

「そんな筈はっ！」

「ないとは言い切れないだろ？ 1%でも可能性があるのならそれは避けた方がいい。」

そうだろ？ 雄二くん」

話を振られた雄二は「ああそつだ」と肯定する。

そして雄二は周りを見渡し、Fクラスの生徒たちに向けて言う。

「お前たち、先に帰ってる。ここからは代表同士の話し合いだ」

雄二の言葉を聞いた平賀も、同じようにDクラスの生徒たちに言う。

その言葉を聞いた生徒たちはぞろぞろと帰って行く。

明久と人巻を除いて。

「お前らも先に帰って体を癒せ」

「確かにそれも良い……」

「ならさつさと……」

「だが断る」

「ジヨジヨネタやめろー!!」

雄二のツツコミに人巻は黙り、代わりとばかりに明久が話し始める。

「ねえ雄二、僕らでもダメなの？」

「差別は出来ねえ」

「……」

「……はあ。平賀、こいつらもいるが構わないか？」

その問いに平賀は頷く。

それを見た雄二は「話を戻すが」と前置きを入れる。

「勿論タダでは言わない。

条件がある」

「聞かせてもらおうか……」

その言葉に雄二は口端を釣り上げて、Bクラスの室外機を指さす。

「俺が合図をしたらあれを壊してもらいたい。

上手く事故に見せかければ嚴重注意で済むさ。リスクはあるがリターンも大きい。どうだ？」

「俺からしてみれば願ったり叶ったりだが、何故そんなことを？」

その問いに明久が横から口を挟む。

「『次の次』の試召戦争の為、でしょ？」

明久の答えに雄二は驚く。

「お前：よく分かったな」

「親友、だからね」

二人は顔を見合わせて笑う。

「お前らは後最低二回は試召戦争をやるつもりなのか…」

「ああそのつもりだ。」

それでさっきの俺からの提案はどうするんだ？」

「勿論呑ませてもらう」

「よし、交渉成立だ。もう帰っていいぞ」

その言葉に平賀は頷き、最後に社交辞令だけを述べて帰って行った。

「ふう、疲れたぜ…」

人巻は本当に疲れていた様で、地べたに座り込んだ。

「僕も疲れたよ…早く帰って寝たい」

明久も人巻に同意するように頷き溜め息を吐く。

「ああ、お前らはさっさと帰って寝ろ。ちゃんと寝る前に勉強しろ」

その言葉に二人とも頷く。

「分かってるよ…」

次は何せ『Aクラス』との試召戦争だからね」

その時、渡り廊下の方から雄二を呼ぶ声がした。声の主は姫路だ。

「ああ悪い二人共、先に帰ってきてくれ。ムツツリー二と秀吉は教室で待ってるはずだ」

「ん、了解」

「へーい」

明久と人巻は秀吉とムツツリー二と合流し、帰路に着いていた。

「雄二のやつ、どうしたのかなあ」

明久の問いに、人巻は如何にもなんでも分かっている様な顔をしながら答える。

「大方姫路さんのパンツでも貰ってるんだろうぜ」

「それはないよ」

「ないのう」

「……ない」

「全否定かよ…」

さり気なく人巻は傷ついた。

「しかし、人巻が人にパンツを貰うよりはあり得るかもしれぬな」

「えー!? それどういうことだよ秀吉ちゃん!! 僕がそれだけモ

「テないって言いたいのか!?」

人巻は内心汗をかきまくっていた。自分の秘密を明かされてしまい
そつで。しかし、人巻は冷静に考える。秀吉がそんなことをするわ
けないじゃないかと。

「違うぞい。人巻は姉上のパンツを見てしまつてから、ロクに下着
売り場さえ見れなくなつてしまう純情ちゃんじゃからな」

「言つたあぁーっ!!! 僕が一番隠して欲しかった場所をサラッ
と言つたあぁぁーっ!!!」

人巻は思った。人間なんか信じちゃダメだと。

「そんなの知つてたよ。僕も雄二も」

「……俺も」

「あれっ!? 皆知つてたのか!?」

今まで気付かれていないと思つていた人巻はとても自分を惨めに思
つた。

その後、各々帰宅し明日に備え勉強をし、明日に備え寝た。

取引とFクラスとAクラス？（後書き）

読んでくださった方、感想をくれると嬉しいです。
出来ればアドバイスなどもください。

修羅場と屋上と弁当（前書き）

御伏四さん、ジャニケルさん、感想ありがとうございます！

疲れたあ…

ある意味ターニングポイントかな？

修羅場と屋上と弁当

明久はいつもより少し早めに登校していた。今日は試召戦争の為にテストを受けなければならぬからだ。学校へと繋がる坂道の端に咲く桜も、既に散り始めていて明久はそれを少し心寂しく感じていた。

「おはよう明久ちゃん」

後ろからかけられた声に明久は振り向く。そこにはいつもと同じ笑顔の人巻がいた。

「おはよう人巻。」

昨日はちゃんと勉強した？」

明久の質問に人巻は少し顔をしかめる。

「あんまりバカにしないでくれよ。僕だってちゃんとやったさ。明久ちゃんの方はどうなのさ」

「うん、ちゃんとやったよ。」

それにしても雄二は、どうやってAクラスに勝つつもりなんだろうね」

「それは雄二くんには分からないさ。僕らは勝つことだけを考えればいい。主戦力としてね」

明久は頷く。

「そうだね。僕らにしか出来ないことをやってやるさ」

その答えに人巻は笑いながら頷く。
明久も人巻に対し笑い返す。

「急ごう。時間は有れば有るほど良い」

人巻の声を合図に、二人は坂道を駆け上り始めた。

「ああー…目の前でパンツが踊ってるー…」

場所はFクラスの教室。

人巻は卓袱台に身を任せだらけていた。

Fクラスの生徒たちは試召戦争で失った点数を取り戻す為、午前中の全ての時間を使ってテストを行った。

相当の物好きでもない限りは地獄であろう。

人巻はある意味物好きではあるが、テストで喜ぶ様な物好きでは勿論ないので、他の生徒と同様にただ疲れていた。

「どんな状況じゃ…」

隣で呟く秀吉も人巻と同じ様に卓袱台に身を任せていた。

「人巻、秀吉。雄二と一緒に飯を食わないかだって」

教卓の方から明久の声がした。

人巻が顔だけ起こし教卓の方を確認すると、雄二と明久、ムツツリ
一二、金城がこっちを見ていた。

「今行くのじゃ…」

人巻が隣を見ると、秀吉が重い腰を上げゆつくりと立ち上がった。

しかし、人巻は立つ気がないので明久たちにここで食べないかと持ち掛ける。

そんな光景に金城は溜め息を吐く。

「疲れてるのは分かるけど少しは体を動かそうよ。

ここは空気悪いしさ」

金城の言葉を聞き、溜め息を吐きながらも人巻は立ち上がり明久たちの方へ歩いていく。

雄二は、人巻が合流したので戸を開け教室を出ようとするが、後ろから呼び止められる。

明久たちが後ろを向くと、そこには姫路がいた。

「あ、あの昨日の約束……」

その言葉を聞き、明久たちは昨日の約束を思い出した。

「ああ、あの約束か。本当に作ってきてくれたのか？」

「はい！」

その答えに明久は少し悪い気がした。

「ごめんね…沢山作らせちゃって…」

「いえ！ 私、お料理が大好きですから！」

その答えに明久は、少なからずほっとした。

「そっか！ 姫路さんは良いお嫁さんになるね！」

笑顔で言う明久に、姫路は顔を梅干しの様に赤くしながら照れていた。

「弁当じゃなくてパンツでも良かったんだぜ？」

からかう様に言う人巻に、姫路は明久のときとは違う意味で顔を赤くした。姫路は下ネタに慣れていないのだろう。

雄二は人巻の発言に溜め息を吐きながら、皆に屋上に行くことを催促し、自分は皆の飲み物を買に行くと言いつつ、人巻はついて行くと言いつつ二人で飲み物を買に行った。

「坂本くんは大丈夫でしょうか……」

「端梨にそんな趣味はないから」

心配そうに言う姫路に金城は苦笑いをしながらツッコむ。

そんな二人を明久たちは笑う。

明久たちは屋上に向かって、笑いながら歩きだした。

場所は屋上。

姫路は弁当を食べる為だけにレジャーシートを敷き、その上に弁当を置いた。

「へえ、量も多いし凄くおいしそうだね！」

明久の言葉に金城は頷いて同意する。

弁当箱の中には綺麗な黄色の卵焼き、食欲をそそるこんがり揚げられた海老フライ、バランスを考えて入れたのであろうごま香るほうれん草のごま和え、他にも色とりどりの弁当の定番であるうおかず

が弁当箱の中に敷き詰められている。

「……………お先に」

「あつ！ズルいぞムツツリー二！」

ムツツリー二は言葉を発するが早いか否か、箸を海老フライにのばしていた。そしてムツツリー二は、海老フライを口に含み咀嚼したと同時に地に伏した。

『……………は…？』

あまりの出来事に一同は唾然とする。

数秒後、ムツツリー二はゆっくりと姿勢を正し座り直し、姫路に向かい親指を立てる。サムズアップだ。

「あつ、お口に合いましたか？良かったです！」

ムツツリー二の仕草に姫路は喜ぶ。しかし姫路を除く一同は釈然としない。

「……………急に眠気が襲ってきた。少し横になる」

その後ムツツリー二はすぐに横になり、そして痙攣しだした。

ムツツリー二の現状を見て、あの弁当がどれほど危険なものかを察知した。

その時、屋上の戸が開いた。雄二と人巻だ。

「おう、待たせたな！おっ、こりゃ旨そうじゃないか」

「本当だね。じゃあ早速食べさせて貰おうかな？」

さっきの惨状を見ていない所為か、来て早々弁当に手をのばす雄二たち。しかし雄二の手を明久、人巻の手を秀吉が掴む。

「ん？ お前らどうした」

「別にパンツじゃないんだから、他人の分まで取らないし大丈夫だよ？」

二人の行動に疑問を持つ二人。

「いや、誠に言いにくいのだが……」

「あれ、二人共どうかしたんですか？」

姫路の発言に二人はどうするか悩む。

素直に本当のことを教えてあげるか、それとも隠し通して現状をどうにかするかを。

明久と秀吉は姫路が傷つかないように隠すことを選び、雄二と人巻に現状を伝えるためムツリー二を姫路に見えないように指をさす。ムツリー二の姿を見た瞬間、二人は合点がいったとばかりに頷き、そっと腕を戻す。

「二人共食べないんですか？」

姫路の質問に男性人は苦笑いで返した。アイコンタクトでどうするかを相談しながら。

「……………ねえ。これ、何入れたの……？」

そんな中、一人会議に参加していなかった金城が姫路に尋ねる。

明久はマズいと感じた。何故なら金城の姫路を見る目が、いつも明久に暴力を振るおうとする島田を見る目にそっくりだったからだ。

「えっ、えっど酢酸を少し…」

金城の目に怯えながら姫路が答える。その答えを聞いた一同はゾツとした。口にしていたら死んでいたかもしれないのだ。しかもムツツリーニはそれを食べてしまった。明久たちは焦りながらムツツリーニに駆け寄り、殺菌成分が含まれているらしいお茶を飲ませた。明久たちは、今はこれだけしか出来ない自分たちを心憎く思った。

「ねえ、味見はしたの？」

「いえ、太っちゃんいますから…」

「太っちゃん？ 人に物を食べさせるのにそこを心配するの？ 心配するところがおかしいと思うよ」

「でもっ」

「でもじゃないよ。今からでも良いから味見してみなよ。死ぬかもしれないけど」

「そんな筈」

「あるんだよ。料理に使うのは化学薬品じゃなくて調味料だよ。勉強は出来ても常識はないんだね。」

良い機会だと思っから教えてあげるけど、これはもう食べ物じゃない。化学兵器だよ。人を殺せる立派なね」

金城の言葉に姫路は言葉を失う。そんな姫路に金城は、更に言葉を重ねようとする。

しかしそれはある物に遮られた。姫路の弁当だ。

冷静さを失った姫路は金城の顔に弁当を投げつけ、泣きながら屋上を後にした。

「熱っ…!!」

金城の頬の皮膚が少し剥がれていた。恐らく化学薬品の効果だろう。明久は急いで下の階まで降り、ハンカチを水道で濡らしてきて金城の頬に当てた。

「ははっ…目に入らなくて不幸中の幸いってやつかな…？」

金城は儂げに笑う。そして不安げに明久に問う。

「ねえ吉井。私のこと嫌いになっちゃった…？」

金城がそんな質問をしてくるとは思えず明久は内心驚いた。

「どうしてそんなこと聞くの？」

「いやだつてさ、姫路さんに言い過ぎちゃったじゃん…」

吉井たちは隠そうとしてたんでしょ…？」

「まあそうだけど、姫路さんにとっても金城がとつた行動の方が良かったと思うよ？ 後々困るだろうしね」

明久らしい答えに金城は少し笑う。しかしすぐ暗い顔に戻ってしま

う。ただ私、泣いてる姫路さんの心配より、倒れてる土屋の心配より、吉井に嫌われることを心配してるんだよ…？」

その質問に明久は笑う。しかしすぐに真顔に戻し真剣に真剣な思いを語る。

「僕は絶対に、誰よりも僕を心配してくれる『香奈』を嫌ったりしないよ」

その答えに香奈は思わず涙を流す。しかし涙を流しながらも笑顔で返事を返す。

「ありがとう、『明久』」

そんな二人を眺めていた雄二たちが声をかける。

「なんだお前ら、名前で呼び合うことにしたのか」

「相変わらず格好いいぜ明久ちゃん」

「ムツツリー二は無事じゃぞ」

「……心配かけた」

ムツツリー二の姿を見た二人はムツツリー二の無事を喜びながらいつもの輪に戻っていった。

皆姫路の心配もしていたが、自分たちではどうしようもないことを理解していたので、まずは皆で今を楽しむことにした。屋上では明久たちの楽しそうな声が天へと響いていく。

場所はFクラス。

姫路は卓袱台にうつ伏せていた。いつもなら声の一つはかけられるだろうが、今の姫路には誰も声はかけない。

姫路を纏っているのは禍々しいオーラ。

負のオーラで埋め尽くされたFクラスで、姫路は誰にも聞こえないように呟く。

「なんで金城さんは……！」

修羅場と屋上と弁当（後書き）

まだ宣戦布告すらしてない…

読んでくれた方々、出来れば感想をください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2045y/>

バカと真面目と召喚獣

2011年11月29日01時48分発行